



## 江戸時代の日本と朝鮮

―文禄・慶長の役で連行されてきた朝鮮人捕虜たち―

日本列島と朝鮮半島、この対馬海峡をはさんだ両地域の関係は、古代以来の長い歴史の中で連綿と続いてきました。

しかし、必ずしも良好な関係が続いたわけではありません。第二次世界大戦後、両地域の関係は、互いに「近くて遠い国」と呼ばれてきました。朝鮮半島は近年の日本を取り巻く国際関係の中で最も注目される地域ですが、その歴史は複雑です。

なかでも、日朝（韓）関係の歴史は、私たち日本人が忘れてはならない傷跡を残した歴史が二つあります。

一つは16世紀の終わりに豊臣秀吉が明（当時の中国）征服のため朝鮮半島に十数万もの軍勢を派兵し、朝鮮民衆に対して残虐な侵略行為をおこなった文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）、もう一つは明治末から、さきの終戦まで続いた韓国の植民地化（韓国併合）です。

前者については、のちに彦根に入る井伊直政が、当時は江戸城修復の任務についており、朝鮮半島に軍勢を送っていませんが、全く無縁ではありませんでした。元禄4年（1691）、彦根藩士が提出

した由緒書によれば、三浦十左衛門家の初代安久は文禄の役の時、井伊直政の使者として朝鮮へ派遣され、使いの御用をすませたあと戦いに加わり、人質を捕らえて帰国、直政から褒賞され、その際の人質の子孫は、今も彦根に居るとしています。三浦家に伝わった古文書の中には、これに関連すると思われる史料が残されています（写真）。

これらは「関所切手」と呼ばれるもので、井伊直政配下の者が、朝鮮半島から対馬・壱岐・名護屋（佐賀県）・関戸（山口県下関市か）を経て、各関所を通過することを許可した通行券でした。関係史料から文禄2年（1593）と推定されるものです。

通行を許可したのは浅野弾正（長吉）・早川主馬（長政）の二人。当時彼らは文禄の役に際して、朝鮮半島に渡り軍目付の役割を担っていました。「此人上下五人、井伊侍従（直政）殿使いのため相越され候、御通しあるべく候」と記されています。「上下五人」とは、身分の高い者と低い者を合わせて五人という意味で

す。三浦安久の名は記されていませんがおそらく安久とその部下に加え、日本に連れ帰る「人質」が含まれていたものと考えられます。

このような事例は、彦根藩だけでなく各地に見られました。日本に捕虜として連れてこられた彼ら朝鮮人の中には、陶工として萩焼や薩摩焼などの基礎を築いた人々がいたことは有名です。彼らは、しだいに日本に同化し、日本文化に影響を与えていきました。

そして、江戸幕府が過去の侵略の歴史を謝罪し、朝鮮国との国交を回復したことにより、侵略の傷跡は、江戸時代の長い年月をかけて癒されてきたのです。近年の研究では、江戸時代に日本に派遣されてきた朝鮮通信使との文化交流や日本各地に朝鮮文化が民衆の中に受け入れられた事例、朝鮮人捕虜たちが、大名家の藩士や儒学者、幕府の御家人や御用達などになり、江戸時代の日本社会の中で違和感なく生きてきたことなどが解明されてきています。

しかしながら明治時代になり、侵略の歴史を繰り返したことにより、その傷跡は再び深くなりました。「近くて遠い国」の距離を縮めるためには、互いの歴史や文化の違いを理解し認め合う姿勢を、ま

ず市民レベルで一人ひとりが持ち、そして時間をかけて、互いの信頼を回復することが大事といえるでしょう。



浅野長吉・早川長政連印関所切手（彦根城博物館蔵 三浦十左衛門家文書）

（彦根城博物館学芸員 母利美和）

写真の史料は、現在開催中の彦根城博物館テーマ展「人権学習シリーズ⑦「異文化との出会い」」で3月4日（火）まで展示します（期間中無休）。